

藤村全集

第三卷

筑摩書房版

藤村全集第三卷

昭和四十二年一月十日發行

著者 島崎藤村

發行者 竹之内靜雄

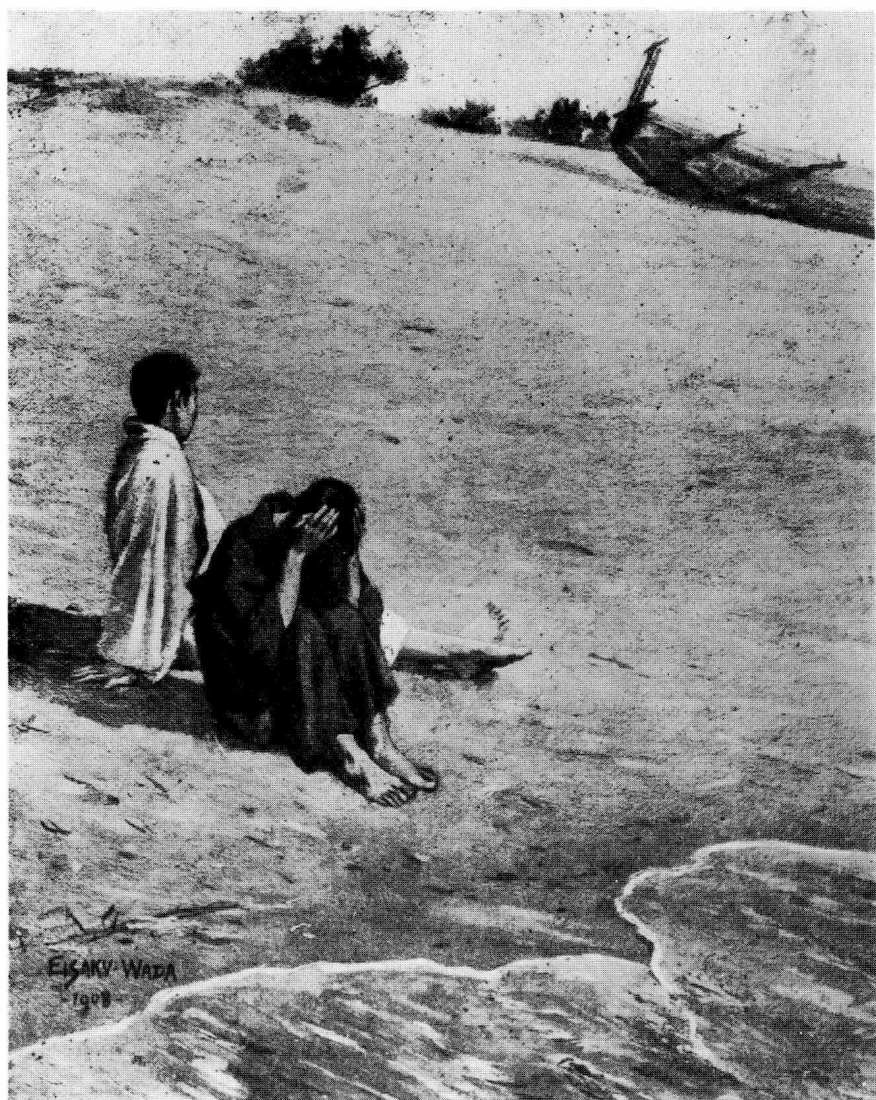
發行所

東京都千代田區神田小川町二ノ八
株式會社 筑摩書房

電話 東京四一七六五一(代表)
振替口座 東京四一二三番



「春」の草稿を書いていたころ（三十六歳）



「春」 初版に収録された口繪

和田英作 畫

第三卷 目次

春

..... 三

藤村集

..... 二四

黄昏

..... 二四

並木

..... 二五

壁

..... 二六

收穫

..... 二七

一夜

..... 二九

伯爵夫人

..... 二九

苦しき人々

..... 三〇

旅

..... 三五

群……………三三

青 年……………三五

死……………三九

弟 子……………四四

土 產……………五五

雜貨店……………六三

奉公人……………七一

河岸の家……………八五

芽 生……………九九

散 步……………四五

解 題……………四一

校 異……………四五

語 註……………五七

春

『岸本君、七月二十二日に東海道の吉原まで來給へ。其日を期して東西から富士のもとに會することとしよう。君の都合もあらうと思ふから爲替で旅費を送る。』

斯ういふ意味の手紙が東京に居る友達から行つたので、いよいよ岸本も西の方の旅から歸つて來るといふ報知があつた。東京の友達はそので新橋を發つ。一行三人、青木、市川、菅——岡見兄弟は都合があつて加はらなかつた。連中が東海道を下つた頃は明治二十六年の夏である。大分其日の汽車は込んだ。一行は疲れて吉原の宿に着いた。會合の場所は街道筋によくある普通の旅人宿である。二階建の離座敷があつて富士は好く見えた。三人が占領したのは其二階の一室で、離座敷の方には他に泊客も無い様子。時々顔を出す四十恰好の家婦より外に放肆な雑談を妨げるものが無かつた。結句氣樂な宿である。汚れた疊の上に寝轉び乍ら、三人は岸本の來るのを待つて居た。

『最早見えさうなものだなあ。』

と言つて青木は身を起した。

青木は瘦ぎすな方で、新しい紺飛白の單衣を着て、兵兒帶を無造作に巻付けて居る。寬げた懷からは白い夏シャツがあらはれて居て、その紐釦の外れたところに、すこし胸の肌が見える。この男の物を視る眼付、迫つた眉、蒼ざめた頬、それから雄々しい傲慢な額なぞの表情は、傷つけ破らざれば休まずとも言つたやうな、非常に過敏な

神經質を示して居た。懺悔するやうな口元には何となく人の心を牽引^{ひきつ}けるところが有つた。それを見ると、世の中の惑溺^{くわく}や汚穢^{けがれ}を嘗^なめ知つた人の口唇^{くちびる}を思ひ出させる。そこから力の籠^{かご}つた聲が出る。

『岸本君も困るでせうね。』と青木は市川の方を見て、『是から將來^{さき}奈何^{どう}する積^きなんでせう。』

『さあ。』市川も身を起した。

『さう何時迄も岡見君の世話に成つては居られないだらうし。』

『實は僕も其を心配して居るんです。』と言つて市川は青木の顔を眺めた。

市川は高等學校の制服を着けて居る。薄鼠色の夏の上衣に包まれた優雅な體格^{きやうしや}、短く黒い髪、蒼白く廣い額、鷹の嘴^{くちばし}を見るやうな隆^{たか}い立派な鼻——すべて彼の風貌^{ふうぼう}に顯れたところは、東京の下町で堅氣な家庭^{けいけ}に育つた人であるといふことを思はせる。彼の細い柔軟^{やわらか}な眼は、大人のやうな思慮^{しりょ}を表して居て、若輩^{わくはい}ながらに世上の人を睨^{にら}むと言つたやうな風があつた。三人の中で、斯の男が一番年少^{としわか}である。

青木は粗末な煙草入を取出して、鈍豆煙管^{なまめぎせる}でスバ／＼やつて、

『しかし面白い變化さねえ、岸本君が家を飛出すなぞは。』斯う言出した。

『どうして彼の男が旅に出る時の勢^{いきさ}は凄^{すさま}じいものでしたよ。』と市川は友達が出奔^{しゅほん}の當時を想ひ浮べるやうな眼付をした。『麵麴^{めんこく}は天にあり、てなことを言つて——』

『はゝゝゝゝ。』

青木は嘲るやうな聲を出して笑つた。

斯ういふ談話^{はなし}の間、菅は横に成つたまゝ身動きもせず居る。

『菅君は可談^{うご}しいねえ。』と青木は考へ深い眼付をしながら、『實に菅君は平和だ。』

『先刻^{さうき}から寝つゞけぢやないか。』と市川も笑ふ。

『僕は眠つて居やしないよ。』と菅も笑出した。『斯うして、君等の談話を聞いて居るんサ。』

二

菅は寢返りを打つやうにぐるりと身を返して、嚙て俯臥のまゝ頬杖を突いた。彼は寢乍ら謹聴といふ態度を執つた。心の好いこと無類といふ斯の青年の眼には哲學者のやうな沈靜がある。彼はまた年に似合はず毛深い方で、腮の邊なぞは奇麗に剃立てゝ居るが、濃く厚い鬚の痕は青々と人の眼についた。連中で彼を好かないものは無い。彼は年寄にも子供にも好かれさうな性質である。

其時、市川は嘆息して、『實は僕も、もうすこしで岸本君の後を追ふところだつたのです。』

『君も左様いふ氣に成つたかねえ。』と青木は同情のある語氣で言つた。

『なにしろ僕のところなぞは事情の多い家庭で、姉と養子の折合は好くないし。』と市川は言ひかけて、暫時對手の顔を眺めて、

『姉は又、何事も知らないものですから、一途に僕を頼りにしてるんです。僕が旅にでも出て了はうものなら、後は奈何なるか知れない。今一步——といふところで、僕は考へました。』

『そこで考へるのが至當だね。』

『岸本君の行き方は左様ぢや無い。彼の男が考へる時分には、最早一步踏み出して了つてる。』

『そんなら見給へ。』と青木は力を入た。『岸本君のやうに破つて出ようとしたところで——畢竟奈何なる。そこが悲しいところさネ。束縛といふ執念深い奴は何處迄も人間に隨いて廻るよ。』

市川は胸を突出して、『兎に角、危険い藝を演つたものだ。』

『はゝゝゝ。』と青木は苛^{ひど}しい聲で笑ひ出した。旅の友達^なの爲に哭^なく心と、局促^{くそく}とした自分の身を嘲^{あざわ}る心と、斯の二つが今彼の胸には一緒に成つて居る。

『流石^{さすが}の岸本君も弱つて來るだらうなあ。』と市川が言つた。『行くところまで行つて見なければ承知しないといふ男だ。』

『彼の男は昔から彼^あ樣いふ風でした。』と菅も寢乍ら腮を突出す。

青木は癖のやうに頭を振つて、『僕に言はせると、あまりに先生は熱し過ぎる。熱するのは面白いが、馬車馬ではツマらん。』

『馬車馬！』市川は横手を打つた。

『彼^あ樣固くなつて了つても困りものだ。』と青木は笑ひ乍ら、二人の對手の顔を見比べて、『奈何^{どう}でせう、君、彼^あ樣いふ男には少^{すこ}許酒でも飲ませて見たら。はゝゝゝ。』

『酒を飲ませるか——こいつは面白からう。』と菅は笑ひ乍ら身を起す。

『菅君が斯ういふことを言出すからねえ。』と市川も一緒に成つて笑つた。

不圖^{ふと}物の音がした。

市川はそれを聞きつけて、耳を澄して居たが、人が來たのでも何でも無いと解つた時は、菅と顔を見合せて笑つた。待つても、待つても、岸本は見えなかつた。

『君、君、』と青木は待ち倦^{あぐ}んで、『斯うして居たつても仕樣がない。すこし其邊^{そこいら}を散歩^{ぶらっ}いて來ようぢやないか。』
驕^{やが}て三人は連立つて二階の梯子を降りて行つた。

三十分許り經つて、斯の宿へ來て草鞋^{わらぢ}を脱いだ一人の青年がある。久留米飛白^{くろめびやく}の單衣^{ひとへ}に角帶を卷付け、夏帽子、

脚絆、尻端折といふ風體で、肩へ掛けるやうにした風呂敷包二つ、他には大和の檜木笠も携へて來た——斯の男が岸本だ。彼は二階へ案内され、そこで脚絆の紐を解いた。さあ、友達は容易に歸つて來ない。青木や市川やそれから菅の置いて行つたもの、洋傘だの、手拭だの、其他手荷物類が室内に散亂つて居る。急に熱い涙が岸本の頬を傳つて流れて來た。彼は自分の汗臭い風呂敷包に顔を押宛て、激しく泣いた。

三

『彼程苦勞して來乍ら、斯ういふ光澤で居るんだからねえ。』と市川は意味有りげなことを言つて、久しく逢はなかつた岸本の顔を眺めた。散歩に出掛けた三人は宿へ引返して旅の友達を取圍いたのである。

紅く泣腫れた岸本の頬は先づ三人の心を動かした。彼の粗く剛い髪、大きな鼻、體軀の割合に幅の廣い肩などは、寒い山國の生れといふことを示して居る。傲岸であると同時に柔弱な、過激であると同時に臆病な、感じ易いと同時に愚圖々々した——斯ういふ憐む可き性質は、彼の容貌を沈鬱にして見せる。彼と、菅とは同窓の友であつた。

『旅費まで送つて貰つて濟まなかつたね。』と岸本はかしこまつたやうに坐り直した。彼は難有いといふ面持で、可憐しい友達の前に手を突いた。

菅は氣の毒さうに、『あれは青木君から、君の方へ送つたんです。』

『恐しく物堅いねえ。』と青木は笑つた。『まあそんなことは奈何でも可いさ。』

長い旅の話が始まつた。三人の友達は熱心に岸本の顔を熟視つた。家を出、職業を捨て、友達と離れて、半歳の餘も諸國を流浪して來たといふことは、岸本が精神の内部をよく説明して居た。夫ほど彼は動搖して居た。彼が漂

泊したところは東海道から西の方で、熱田から便船で四日市へ渡る、龜山といふところに一晚泊る、それから伊賀近江の國境を歩いたが、其間には種々な寂しい悲しい旅の思を経験した。黒ずんだ琵琶湖の水を眺めた。西京の舊い都も見た。須磨の海岸には暫時逗留して居たこともあつた。彼は又、伊豫行の汽船に乗つた。それは舊友の足立を訪ねる爲であつた。そればかりではない、彼は大和の方へも一月餘の旅をして、吉野の宿で岡見の兄に邂逅つた。琵琶湖に近い茶丈の生活はまだ岸本の眼にあつた。彼が西京から湖水の畔へ引返して、それから斯の吉原へやつて来る迄、二月半ばかりの間は茶丈を一間借りて居た。其頃は自炊だ。終には小爐を煽ぐのも面倒臭くなつて、三度三度煮豆で飯を喰つたこともあつた。亭主といふは大工が本職で、傍寺へ納める花を作つたし、内儀は内職に螢の籠を張る、子息は天津の下駄屋へ奉公して居る、斯様な人達と岸本はしばらく同じ屋根の下に暮した。そのうちに、蛙が鳴出す、螢が飛んで来る、蚊に責められるのが苦いから彼は自分で紙帳を張つて、裾へは古錢を飯粒で貼付けて、澁團扇でバタ／＼風を入れては其内へ入つて寝た。『ソラ、また始まつた。』と家の人達が聞きつけてクスクス笑つたものであつた。内儀はよく時の惣菜などを皿に盛つて持つて來て呉れた。ある晩、亭主が天津の方へ行つた留守に、紙帳の外で『岸本さん、岸本さん、』と呼ぶ聲がする。岸本は黙つて震へて居たが、それから急に可恐しくなつて、丁度友達から爲替が來たのを幸、逃げるやうにして江州の宿を發つた。尤も斯様な事は三人の前では話さなかつた。

『憐む可き巡禮だ。』

と青木は心に繰返して居た。

四

間もなく飲食する物がそこへ持運ばれた。久しぶりの會合といふので、互ひに酒を酌みかはした。楽しい、放肆な、人の心を浮々させるやうな飲料は、結ばれて解けない岸本の胸をも流れたのである。

『菅君はいけないんですか。』と青木は盃を差して、『すこしやり給へな。』

『いえ、駄目です。』と菅は手持無沙汰に見えた。『僕は奈良漬に酔ふ方の口なんですから。』

『全く菅君はやりません。』と岸本は辯護するやうに言つた。『さうく、菅君と一緒に高輪の蕎麥屋で飲んだことがあつた。彼の時は君、ホラ、二人で五勺詠へたつけね。』

『五勺詠へるやつが有るもんか。』と青木は笑ふ。

岸本は菅と顔を見合せた。菅は笑つて舌を出して見せた。

『市川君はいけさうだ。』と青木は銚子を持添へて勸めて、『まあ、もう少しやり給へ。』

『僕は蒼くなる方です。』と市川は兩手で頬を押へて見る。

『蒼くなるのは強いんださうだ。』と菅が物を頬張り乍ら言つた。

『一體、市川君は何歳でしたツけ。』と青木は何か思出したやうに、『僕は未だ君の年齢をよく知らない。』

『僕ですか。』と市川は笑つて、『僕は二十一でさ——たしか岸本君は明治五年でしたね、僕は六年だ。』

『左様かなあ、皆な未だ若いんだなあ。』と言つて、青木は菅の方を見て、『菅君は寧ろ僕の方に近いでせう——どうも其鬚の様子では。』

『えい。』と菅は笑ひ乍ら、青々とした腮おどの邊を撫でた。

其時市川は眼鏡越しに岸本の様子を眺めて居たが、妙に意味有りげな微笑ほくそえを浮べた。

自分の膳の上にあつた盃をグツと一息に乾して、それを差し乍ら、

『岸本君の爲に西京さいきやうの健康を祝す。』

と乙おつなことを言ひ出した。急に岸本は紅くなつた。

『西京といふ人の噂がよく出たツけなあ。』と菅も微笑み乍ら。

『是の男もなか／＼罪の深い方さ。』と市川は岸本の方を見て、軽く對手の膝たひを敲くやうな手付をした。『君、君、東京の方で心配してる人が有りますよ。』

青木も菅も笑はずには居られなかつたのである。

總て共同の事業しごとの話が出た。彼等の中には早くから社會よのなかに出て働いて居るものも有り、未だ親がゝりで學校へ通つて居るものも有る。境遇は區々まちまちである。岡見兄弟の家といふは日本橋大傳馬町の經節問屋であつたから、一切の費用は其方そつちで持出して、雑誌を出すことにしたのが其年の正月——丁度、連中の一人の岸本が旅に出たと同じ月であつた。

醉が廻るに随つて餘計に遠慮が無くなつて來る。岸本が旅で書いた稿もの中にある笑ふ可き文句の眞似なぞが始まる。菅や市川は盛んに其をやり出した。『馬車馬』といふ言葉も幾度か繰返された。眼の兩側へ手を宛行あてがつて、鼻息ばかり荒く驅出して行く獸の光景さまなどを見せつけられるので、岸本はもうシヨゲ返つて了つた。青木は又、聞いて貰ふ積で、自分の書きかけの草稿を風呂敷包の中から取出して讀んだ。

それは元祿の大家が明治の代に復活いしかへした頃であつた。外國の文學も次第に海を越して入つて來た。

英吉利イギリスの詩歌——殊にシエクスピアの戯曲は青年の間に讀まれた。よく連中の話頭はなしにも上る。